

特集 こころ交差点

自宅や職場とも隔離された「自分時間」。肩書きを捨てて一人の人間としてくつろぎ、時に他人との交流を楽しむ空間。そんな心地よい第三の居場所をサードプレイスと呼ぶそうです。自ら集い場を見出し、楽しい時間と空間を他者と共有することが、地域に固有の文化や物語を育む土壌であることは今も昔も変わりません。今日も人びとが交流するふもとの集い場を訪ねました。



ただ座って 自分と向き合う 優しい人々の朝時間

養老鉄道の終着揖斐駅から脛永公民館方向を目指して十五分ほど歩くと重厚な鐘楼門が見えてくる。曹洞宗金龍山法幢寺だ。室町時代の一四九九年、大本山總持寺直系の妙応寺（関ヶ原町今須）より松徑章説（まつかじ）を迎えて開山し

たという古刹だ。

この寺院という場所が私たちの日常から遠いものになつてどのくらい経つのだろうか。しかし今朝の境内には、真夏にもかかわらず早朝の涼しさと静寂を楽しむ人たちの姿がある。

朝七時半から始まる法幢寺の座禅会。二年前から行われているこの集いには、宗派にとらわれず様々な人たちが足を運んでいると以前から聞いていた。この日の参加者は先輩者から地元の養基小学生児童まで九人。きつと檀家の方が多いだろうと思ひ込んでいたが、同寺と無縁の人たちが参加していたのは意外だった。

本堂に鎮座するご本尊の延命地藏菩薩像を背に、庭の借景を遮断した障子に向かつてあぐらをかき、背筋をのばして両手を組む参加者たち。「そ



■金龍山法幢寺
座禅会／毎月第4土曜日
7:30～8:00
参加費・予約ともに不要
揖斐川町脛永1072
☎0585-22-1602

座禅会／揖斐川町脛永 金龍山 法幢寺

はぎなが
ほうどうじ



れでははじめましょう」。赤田賢了住職（三七）がそう言うのと、広い本堂内の音の世界は鳥のさえずりだけとなった。

住職は警策（しやうさく）を構えるわけでもなく、別の場所ですともたち三人と障子に向かって座禪を組んでいる。参加者たちは肩をたたかれる恐れもなく、ただひたすらに己の内面を見つめて座る「只管打坐」に徹している。十五分ほどで座禪は終了すると、参加者たちはご本尊の方に向きを変えた。みんなで般若心経をお唱えする勤行（ごんぎやう）が始まるからだ。これも七、八分で終わると別室に移動し茶話会へ。参加者たちは、お茶とお菓子が用意された机を囲んでしばし雑談。中には身の回りの出来事を報告する人もいるが、余計な助言があるわけでもない。最後に赤田さんが感謝の言葉や同寺

の今後の行事を案内して座禪会はお開きとなった。

「ここに集まる方はほとんど同じ顔ぶれですが、皆さんいい人ばかり。座禪会には最初から参加してはいますが、いつの間にか大切な場所になっ

てしまいました」と、垂井町から参加したという女性。

法幢寺の檀家総代を務めたこともある長老は「先代亡き後、現在の住職は若いのによくやっています。座禪会も彼が始めましたが、口コミで人



が集まりはじめましたし、子どもたちも嫌がることなくここにやってくる。彼の人柄ですわね」。

赤田さんは法幢寺二十三世になるが、長浜市出身で先代良英との血縁関係はない。先代亡き後、妙応寺住職らの勧めもあり同寺住職となって九年目。「みんな座禪を通じて何かを求めていることは確かです。でもそれは悩みの解決ではなく心地よい何か。毎回座禪会に参加している小学生は般若心経を自然に暗記して口ずさむようになりました。不思議なんです」と赤田さんは目を細める。

何をするにしても対価が求められる今の社会にあって、ここではその日限りの集いを形づくる。心地よい他者との交流と日ごろの自分を見つめ直す時間がゆつくりと流れている。

